

注 意 事 項

1. 試験問題の数は50問で解答時間は正味2時間10分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。
 - (1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを一つ選び、次の例にならって答案用紙に記入すること。

(例) 101 県庁所在地はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

正解は「c」であるから答案用紙の

101 a b c d e のうち c をマークして

101 a b c d e とすればよい。

- (2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例…… (濃くマークすること。)

悪い解答の例…… (解答したことにならない。)

- (3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。
- (4) 1問に二つ以上解答した場合は誤りとする。
- (5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 23歳の男性。四肢の筋力低下と悪心・嘔吐とを主訴に母に伴われて来院した。8日前から屋内で塗装作業を10時間連日行った。今朝午前4時に「トイレで立ちあがれない。」と同居の母に訴えた。意識は清明。視力・聴力の障害はなく、四肢筋力の低下が著明であるが感覚障害はない。以前にシンナー中毒の既往があり、この時四肢の筋力低下も生じている。

診断に最も重要な情報はどれか。

- a 高校生の時に不整脈を指摘された。
- b 四肢の筋力低下を発症したものは同胞にいない。
- c 保護具なしでトルエンを使用した。
- d 17歳から1日20本以上喫煙している。
- e 少量のアルコールでも顔面が発赤する。

2 80歳の女性。昨日来の発熱、頭痛、咳、痰の咯出および食欲不振を訴えて時間外に内科外来を受診した。4か月前に腰痛症で同病院の整形外科外来を受診した既往がある。胸部聴診所見に異常はない。胸部エックス線写真にも異常を認めず、急性上気道炎が疑われた。

保険医の行為として誤っているのはどれか。

- a 整形外科医が記載した診療録の次の行に記載する。
- b 抗菌薬服用の要否を説明する。
- c 通院治療でも良いのではないかと説明する。
- d 介護保険法の医療給付を適用する。
- e 時間外外来初診料を請求する。

3 28歳の男性。半年後に米国への転勤が決まり、渡米にあたり医療面でどのような準備をしたらよいかという助言を求めて訪れた。妻(26歳)と子供(1歳6か月)とを同伴する。既往歴には特記すべきことはない。男性の父親が糖尿病で治療中である。

まず最初に準備するよう助言するのはどれか。

- a 米国での医療保険の加入
- b 米国でのかかりつけ医の選定
- c 渡米前の家族3人の一般健康診査
- d 本人の経口ブドウ糖負荷試験
- e 子供の予防接種計画

4 19歳の女性。交通事故で大腿骨骨折のため近医に入院した。この病院には産婦人科はない。入院後下腹部痛を訴えたため産婦人科医に往診を依頼した。超音波検査で子宮内に心拍のある胎児を認め、妊娠12週相当の切迫流産と診断された。患者は妊娠中絶を希望している。

この患者の人工妊娠中絶について正しいのはどれか。

- a 産婦人科医であれば施行できる。
- b 患者の親権者の同意があれば施行できる。
- c 完備した手術室があれば母体保護法指定医が往診し施行できる。
- d 胎児に明らかな奇形を認めれば母体保護法指定医でなくても施行できる。
- e 胎児心拍が停止すれば母体保護法指定医でなくても施行できる。

5 A市市役所の保健衛生担当課長が、その市を所管する保健所長を訪ねた。課長の話によると、近年市内在住者からの大腸癌死亡者が増えた。また、大腸癌死亡率も近隣の市町村より高いように思うという。

事実確認のため保健所長がまず行うのはどれか。

- a 禁煙対策の強化
- b 市民の食事調査
- c 身体活動目標値の設定
- d 管内の大腸癌年齢調整死亡率の算出
- e 市内全病院からの大腸癌患者情報収集

6 人口100万の市で糖尿病発症予防のため耐糖能異常者を対象として栄養指導と運動負荷による介入研究を行うことにした。空腹時血糖値で一次スクリーニングを行い、経口ブドウ糖負荷試験を二次スクリーニングとして対象者を選ぶこととする。年齢は40~65歳とする。無作為割付けにより介入群と対照群とに分ける。介入中も経口ブドウ糖負荷試験により中間解析を行う。

適切でないのはどれか。

- a 一次スクリーニングには基本健康診査の結果を用いる。
- b 血糖値測定は単一機関で行う。
- c 介入指導には医師の付添いが必要である。
- d 評価は糖尿病の累積発症率をもってする。
- e 中間解析の結果、介入が有効と判明したらその時点で研究を中止する。

7 36歳の女性。5経妊3経産。避妊の相談のため来院した。最後の2回の妊娠はコンドーム法の失敗による妊娠であった。月経周期は28~45日で不整であり、最近5年間はほぼ毎日ビール1本の飲酒歴と1日20本の喫煙歴とがある。

この女性に最も適切な避妊法はどれか。

- a オギノ式
- b 基礎体温法
- c 殺精子薬
- d 低用量経口避妊薬
- e 子宮内避妊器具(IUD)

8 32歳の女性。遺伝相談のために来院した。父が常染色体優性遺伝疾患に罹患している。この疾患の浸透率(penetrance)は50%。近親婚はなく、本人は発症していない。家系図(別冊No. 1)を別に示す。

第1子が発症する確率はどれか。

- a 1/4
- b 1/8
- c 1/12
- d 1/16
- e 1/24

別冊
No. 1 図

9 40歳の男性。前月行われた勤務先での定期健康診査の結果を持参して来院した。健康診査の所見を以下に示す。身長170cm、体重70kg。血圧144/92mmHg。喫煙40本/日。飲酒1合/日。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血清生化学所見：空腹時血糖92mg/dl、総コレステロール230mg/dl、トリグリセライド140mg/dl(基準50~130)、AST38単位(基準40以下)、ALT30単位(基準35以下)、 γ -GTP46単位(基準8~50)。心電図所見に異常はない。

この患者の対応で適切なものはどれか。

- a 禁煙する。
- b 禁酒する。
- c 降圧薬を服用する。
- d コレステロール降下薬を服用する。
- e 食塩の摂取を1日15gにする。

10 30歳の男性。大学在学中に被害妄想と幻聴とに支配された行動のため精神科病院に入院した。2年前に退院して外来通院しているが、就職しても長続きせず、1年前からは自宅で無為に過ごすことが多い。家族の受入れは良好である。

この患者に適した施設はどれか。

- a 援護寮
- b グループホーム
- c 精神科デイケア
- d 福祉ホーム
- e 授産施設

11 39歳の女性。SLEに対しステロイド療法を行っていたところ、喀痰塗抹で抗酸菌が検出された。入院していた病室は4名の相部屋であった。

正しいのはどれか。

- a 培養結果が出てから対応を考える。
- b 直ちに副腎皮質ステロイド薬を中止する。
- c 結核専門病院に移送する。
- d 個室管理とする。
- e 自宅療養とする。

12 65歳の男性。右顎下腺癌で腫瘍全摘と頸部郭清術とを受けた。術後半年後の舌の写真(別冊No. 2)を別に示す。軽度の構音障害と嚥下障害とを認めるが、他の身体所見に異常はない。

障害部位はどれか。

- a 舌神経
- b 舌咽神経
- c 舌下神経
- d 頸神経叢
- e 星状神経節

別冊
No. 2 写真

13 15歳の女子。腹部膨満を主訴に来院した。乳幼児期から頑固な便秘があり、浣腸で排便を促していた。5日前から浣腸しても排便がない。来院時の腹部の写真(別冊No. 3A)と腹部立位エックス線単純写真(別冊No. 3B)とを別に示す。

この疾患で障害されているのはどれか。

- a 粘膜上皮細胞
- b 壁在神経節細胞
- c 平滑筋細胞
- d リンパ管
- e 血管

別冊
No. 3 写真A、B

14 27歳の女性。定期健康診断で血液異常を指摘され、精査を勧められて来院した。母親が軽度の貧血を指摘されているが日常生活に支障はない。身長155 cm、体重45 kg。体温36.6℃。脈拍76/分、整。血圧106/64 mmHg。皮膚、粘膜に貧血は明らかでなく、黄疸を認めない。リンパ節腫大はない。胸部に異常所見はなく、腹部も平坦、軟で肝・脾を触知しない。下腿に浮腫はなく、神経学的所見に異常を認めない。尿検査に異常はない。便潜血反応陰性。血液所見：Hb 12.3 g/dl、MCV 78 μm^3 、網赤血球16%、白血球4,800(好中球65%、好酸球2%、好塩基球1%、単球6%、リンパ球26%)、血小板28万。血清生化学所見：総蛋白7.2 g/dl、アルブミン4.3 g/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、AST 16 単位(基準40以下)、ALT 12 単位(基準35以下)、LDH 350 単位(基準176~353)、Fe 153 $\mu\text{g/dl}$ (基準80~160)、TIBC 303 $\mu\text{g/dl}$ (基準290~390)、フェリチン98 ng/ml(基準20~120)。CRP陰性。末梢血塗抹標本で標的赤血球を認める。

この患者で予想される検査所見はどれか。

- a 血清ビタミンB₁₂ 低値
- b Ham 試験陽性
- c 直接Coombs 試験陽性
- d ヘモグロビンA₂ 増加
- e 赤血球浸透圧抵抗減弱

15 65歳の女性。物忘れがひどいことを主訴に家族に伴われて来院した。自分が置いた財布の場所を忘れて、「どろぼうが家に入り、財布を盗んだ。」と言ったり、夕方になると「ここは自分の家ではない。もう家に帰らなければ。」と言って、家を出て行こうとする。家族によれば、最近はやがままで短気になったと言う。

この患者で障害されていないのはどれか。

- a 性格
- b 記憶
- c 思考
- d 知覚
- e 見当識

16 52歳の女性。1か月前から動悸と前頸部痛とが持続するため来院した。この間に体重が2 kg減少した。体温37.6℃。脈拍108/分、整。血圧152/76 mmHg。皮膚は湿潤しており、手指に細かい振戦を認める。右前頸部に著しい圧痛がある。赤沈88 mm/1時間。

診断に最も有用な検査はどれか。

- a ガリウムシンチグラフィ
- b 副甲状腺機能検査
- c 甲状腺機能検査
- d 下垂体機能検査
- e 心エコー検査

17 3歳の男児。易感染性の精査のため紹介され来院した。1歳ころから呼吸器感染症と皮膚化膿症とを繰り返している。発育は正常で、知的障害はない。両親は健康であるが、母方の従兄弟に同様の症状を示す者がいる。血液所見：赤血球390万、Hb 11.5 g/dl、Ht 32%、白血球6,800、血小板21万。血清IgG 90 mg/dl(基準770~1,550)。

この患児の血中で低下しているのはどれか。

- a 好中球
- b 単球
- c Tリンパ球
- d Bリンパ球
- e NK細胞

18 26歳の初産褥婦。乳房の疼痛を主訴に来院した。分娩後2日目から乳房の腫脹と軽度の疼痛とを認めたが、その後の授乳により若干改善し分娩後5日目に退院した。退院後2日目に右側乳房の発赤、腫脹および疼痛が出現した。体温36.5℃。血液所見：赤血球390万、Hb12.0g/dl、Ht37%、白血球6,600、血小板24万。CRP0.2mg/dl(基準0.3以下)。

適切な処置はどれか。

- (1) 乳頭清拭
- (2) 搾乳
- (3) 授乳禁止
- (4) 冷湿布
- (5) 乳汁分泌抑制薬投与

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

19 生後28日の新生児。健康診査のため来院した。在胎40週、自然分娩で出生した。出生体重3,100g、身長49cm、頭囲34cm。母乳栄養。排便回数1日5～7回。便は黄色で、柔らかく、酸臭がするとのことである。哺乳時間は約15分で、1日哺乳回数は6～8回。母親は、大きな音がするとびっくりしたように両手を大きく広げて足をすくめる動作が気になるという。来院時体重3,850g。体温37.2℃。呼吸数40/分。脈拍120/分、整。大泉門は1.5cm開大している。胸部に異常所見はない。腹部は平坦、軟で、肝を右肋骨弓下に1.5cm触知し、弾性軟である。臍帯は脱落している。

正しいのはどれか。

- a 母乳不足である。
- b 大きな音への反応は異常である。
- c 脈拍は異常である。
- d 便の酸臭は異常である。
- e 肝の大きさは生理的範囲内にある。

20 14歳の女子。無月経を主訴に来院した。8か月前に自分は太っていると思い、食事制限と過剰な運動とを開始した。また時々嘔吐を自己誘発している。初経は12歳で、4か月前から月経はない。身長151cm、体重34kg。体温35.8℃。脈拍44/分、整。血圧84/54mmHg。血液所見：赤血球424万、Hb13.2g/dl、白血球2,600、血小板21万。血清生化学所見：総蛋白5.9g/dl、アルブミン3.7g/dl、AST114単位(基準40以下)、ALT294単位(基準35以下)、総コレステロール239mg/dl、Na142mEq/l、K4.0mEq/l、Cl106mEq/l、T₄4.0μg/dl(基準5～12)。

この疾患でみられるのはどれか。

- a 下痢
- b 知能低下
- c 活動性低下
- d 夜間高体温
- e ボディイメージの障害

21 45歳の男性。前胸部と腹部との皮疹を主訴に来院した。10数年前に皮疹の出現に気付いた。皮膚の外傷後に増加する。軀幹の皮疹の写真(別冊No.4)を別に示す。

この疾患で誤っているのはどれか。

- a 痒痒を伴う。
- b 良性である。
- c 膠原線維が増殖する。
- d 難治性である。
- e 単純切除術が有効である。

別冊
No. 4 写真

22 23歳の女性。全身の皮疹を主訴に来院した。気管支炎のため3日前からペニシリン系抗菌薬を内服したところ、昨日から軽い癢疹を伴う発疹が全身に出現し持続している。数年前に抗菌薬の内服で薬疹が出たことがある。体温37.5℃。圧迫により退色する粟粒大の紅斑を全身性に認める。血液所見：赤血球390万、Hb12.3g/dl、白血球8,600(好酸球12%)。血清生化学所見：AST96単位(基準40以下)、ALT103単位(基準35以下)。CRP3.5mg/dl(基準0.3以下)。

対応として誤っているのはどれか。

- a 服用中の抗菌薬を中止する。
- b 抗ヒスタミン薬を投与する。
- c 副腎皮質ステロイド薬を経口投与する。
- d 肝庇護薬を投与する。
- e 他のペニシリン系抗菌薬に変更する。

23 85歳の男性。左側腹部に突然痛みが始まり、救急外来を受診した。心房細動を指摘されていたが放置していた。腹痛のため表情は苦悶状である。体温37.0℃。呼吸数20/分。脈拍88/分、不整。血圧160/94mmHg。左側腹部の強い痛みを訴えるが腹部は平坦、軟である。血液所見：赤血球411万、Hb12.5g/dl、Ht36%、白血球21,200、血小板16万、FDP16μg/ml(基準10以下)。血清生化学所見：尿素窒素24mg/dl、クレアチニン1.5mg/dl、AST160単位(基準35以下)、ALT101単位(基準40以下)、LDH1,932単位(基準176~353)、アミラーゼ73単位(基準37~160)、CK20単位(基準10~40)。腹部造影CT(別冊No.5)を別に示す。

腹痛の原因はどれか。

- a 腎梗塞
- b 肝動脈塞栓症
- c 急性膵炎
- d 上腸間膜動脈血栓症
- e 腹部大動脈解離

別冊
No. 5 写真

24 30歳の男性。腹痛を主訴として来院した。10か月前から、廃車となった自動車の蓄電池電極板を精錬する工場の現場で働いている。最近、全身倦怠、頭痛、食欲不振、口中の金属様の味、便秘および嘔吐が起こるようになった。腹痛は痙攣性で、顔面の皮膚は蒼白である。身長168 cm、体重65 kg。血圧138/86 mmHg。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球358万、Hb 9.8 g/dl、白血球4,500。

原因として最も疑われるのはどれか。

- a 銅
- b 錫
- c 水銀
- d 鉛
- e マンガン

25 72歳の女性。感冒様症状が出現し、早朝から傾眠がちとなり、意識レベルも低下したため、救急車で搬入された。20歳の時、肺結核のため胸郭形成術を受けた。5年前から慢性呼吸不全で在宅酸素療法を受けている。体温37.2℃。呼吸数10/分。脈拍100/分、整。血圧150/70 mmHg。血清生化学所見：血糖160 mg/dl、尿素窒素35 mg/dl、AST 45 単位(基準40以下)、ALT 37 単位(基準35以下)、アンモニア50 μg/dl(基準18~48)。動脈血ガス分析(自発呼吸、経鼻カニューラ O₂ 1 l/分)：pH 7.27、PaO₂ 40 Torr、PaCO₂ 90 Torr。

最も適切な治療はどれか。

- a 降圧薬投与
- b 抗菌薬投与
- c インスリン投与
- d 人工呼吸
- e 血液透析

26 75歳の男性。5年前から外陰部に痒みを伴う皮疹が生じ、湿疹の診断で治療を受けているが改善しないため来院した。血液所見：赤沈10 mm/1時間、赤血球390万、Hb 12.5 g/dl、白血球6,200、血小板20万。血清生化学所見：尿素窒素18 mg/dl、クレアチニン1.1 mg/dl。外陰部の写真(別冊No. 6A)と皮膚生検組織のH-EおよびPAS染色標本像(別冊No. 6B)を別に示す。

適切な治療はどれか。

- a 抗真菌薬外用
- b 免疫抑制薬内服
- c 抗ウイルス薬内服
- d PUVA療法
- e 外科的治療

別冊
No. 6 写真A、B

27 40歳の男性。最近、物にぶつかるようになり、右眼視野の外側が見えないことに気付いたため来院した。視力は右1.0(矯正不能)、左1.0(矯正不能)。眼圧は右14 mmHg、左12 mmHg。視野図(別冊No. 7)を別に示す。

障害部位はどれか。

- a 網膜
- b 視神経
- c 視(神経)交叉
- d 視索
- e 視放線

別冊
No. 7 図

28 50歳の男性。夜間の呼吸困難で来院した。20年前に心雑音を指摘され、心電図で心肥大を認めている。血圧 152/34 mmHg。胸骨右縁第3肋間に駆出性収縮期雑音と拡張早期雑音とを聴取する。

この疾患でみられるのはどれか。

- (1) 速脈
- (2) 奇脈
- (3) II音分裂
- (4) 僧帽弁開放音
- (5) Austin Flint 雑音

a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3) d (3), (4) e (4), (5)

29 58歳の女性。視野のぼやけを主訴に来院した。6か月前から全身倦怠感を自覚し、2か月前から鼻出血が数回あった。数日前から頭痛、眩暈および手足のしびれ感があり、今朝から主訴に気付いた。体温 36.5℃。脈拍 92/分、整。血圧 110/64 mmHg。表在リンパ節は全身性に径 2～3 cm に腫大しているが圧痛はない。両側下肺野に coarse crackles (水泡音) を聴取する。肝を右肋骨弓下に 3 cm、脾を左肋骨弓下に 5 cm 触知する。腱反射に左右差はない。血液所見：赤沈 116 mm/1時間、赤血球 280 万、Hb 9.2 g/dl、Ht 30%、白血球 27,300 (桿状核好中球 5%、分葉核好中球 12%、好酸球 1%、単球 4%、リンパ球様細胞 78%)、血小板 7 万。血清生化学所見：総蛋白 9.8 g/dl、アルブミン 3.8 g/dl、IgA 520 mg/dl (基準 110～410)、IgG 980 mg/dl (基準 960～1,960)、IgM 4,500 mg/dl (基準 65～350)、骨髓血塗抹 May-Giemsa 染色標本(別冊No. 8)を別に示す。

この患者でみられるのはどれか。

- a 項部硬直
- b 網膜静脈怒張
- c 多毛
- d クモ状血管腫
- e ばち指

別冊
No. 8 写真

30 60歳の男性。3か月前から続く腰痛のために来院した。眼瞼結膜は貧血様。胸部に異常なく、腹部は平坦である。血液所見：赤血球390万、Hb 9.2 g/dl、白血球4,100、血小板18万。血清生化学所見：総蛋白10.7 g/dl、アルブミン4.1 g/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、AST 26 単位(基準40以下)、ALT 24 単位(基準35以下)。脊椎エックス線単純写真で第3腰椎に骨折所見を認める。骨髓血塗抹May-Giemsa 染色標本(別冊No. 9)を別に示す。

予想される所見はどれか。

- a 尿ヘモジデリン陽性
- b 赤沈遅延
- c 正常免疫グロブリン低下
- d 多クローン性γ-グロブリン増加
- e 血清カルシウム低下

別 冊
No. 9 写 真

31 80歳の女性。夫の浮気のためイライラ感と不眠とが続くと訴えて家族に伴われて来院した。1年前糖尿病のため入院したが、その半年後から85歳の夫が浮気をしていると責めるようになった。全くその事実はないが説得不能で、最近家族も相手にしなくなった。診察時も夫の性的問題をあからさまに訴えるが、日常生活は自立しており物忘れも目立たない。幻聴は否定し夫の浮気の件以外に奇異な言動はみられない。意識は清明で神経学的に異常所見はない。

最も考えられるのはどれか。

- a 統合失調症(精神分裂病)
- b 双極性障害
- c 妄想性障害
- d 症状精神病
- e 血管性痴呆

32 28歳の男性。2か月前から出現した両手のしびれ感を主訴に来院した。7年前から手足が大きくなってきたことに気付いている。身長167 cm、体重65 kg。脈拍80/分、整。血圧138/90 mmHg。血中成長ホルモン31.4 ng/ml(基準1.5以下)。頭部単純MRIでトルコ鞍内に径13 mmの腫瘤を認める。

この患者にみられる症候はどれか。

- (1) 巨大舌
- (2) 手指振戦
- (3) 皮膚乾燥
- (4) 下顎突出
- (5) 足底軟部組織肥厚

- a (1)、(2)、(3)
- b (1)、(2)、(5)
- c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4)
- e (3)、(4)、(5)

33 19歳の女性。妊娠の確認のため来院した。月経周期は28日型、整であり、最終月経は平成15年1月18日から5日間であった。2月の月経発来が遅れていたため、2月25日に市販の妊娠診断補助試薬で検査したところ陽性であった。そのころから悪心が次第に強くなってきた。受診時の内診所見で子宮は超鶏卵大、軟で、子宮付属器は触知しない。カレンダー(別冊No. 10)を別に示す。

来院時の平成15年3月17日に診断できないのはどれか。

- (1) 稽留流産
- (2) 子宮外妊娠
- (3) 胞状奇胎
- (4) 前置胎盤
- (5) 胎児心奇形

- a (1)、(2)
- b (1)、(5)
- c (2)、(3)
- d (3)、(4)
- e (4)、(5)

別 冊
No. 10 図

34 2歳の男児。熱傷の治療のため父親に伴われて来院した。昨晚9時ころ、山奥のキャンプ場で、熱湯で胸部と右上肢とに熱傷を受けた。冷水で冷やした後、今朝早く下山した。元気がなくぐったりしている。体温39℃。脈拍160/分、整。血圧78/40 mmHg。熱傷面積は約20%で水疱形成がみられる。血液所見：赤血球560万、Hb 18 g/dl、Ht 55%、白血球10,700、血小板36万。

この患児で最も考えられるのはどれか。

- a 心原性ショック
- b 脱水性ショック
- c 細菌性ショック
- d 高熱による意識低下
- e 肺水腫

35 22歳の男性。バイク走行中にトラックと衝突し全身を強打した。呼吸困難を訴え救急車で搬入された。意識JCS 10。呼吸数24/分。脈拍104/分、微弱。血圧74/34 mmHg。瞳孔径に左右差なく、対光反射は両眼で正常である。眼瞼結膜に貧血はなく、眼球結膜に黄疸はない。外頸静脈は怒張している。心音は減弱し、呼吸音に異常はない。腹部は平坦、軟である。四肢に運動障害はない。

血圧低下の原因として最も考えられるのはどれか。

- a 頭蓋内血腫
- b 頸髄損傷
- c 胸腔内出血
- d 心タンポナーデ
- e 腹腔内出血

36 35歳の女性。両側手関節痛が1週間から持続するため来院した。1か月前から微熱と倦怠感とがある。手関節に軽度の圧痛を認める以外に、身体所見に明らかな異常は認めない。尿所見：蛋白1+、糖(-)。血液所見：赤沈40 mm/1時間、赤血球390万、Hb 12.8 g/dl、白血球3,500。血清生化学所見：総蛋白7.0 g/dl、アルブミン4.1 g/dl、 γ -グロブリン25%。抗核抗体検査の蛍光染色像(別冊 No. 11)を別に示す。

考えられる疾患はどれか。

- a 全身性エリテマトーデス
- b 関節リウマチ
- c 強皮症
- d 多発筋炎
- e 混合性結合組織病

別冊 No. 11 写真

37 45歳の女性。強い空腹感と意識消失発作とを主訴に来院した。3年前から食事時間が遅れたり、家事で忙しく動き回ったときに強い空腹感を自覚していた。1か月前、市の健康診査で上部消化管造影のため1晩絶食したところ、冷汗、手指のふるえ及び集中力低下が認められた。昨日、朝食を抜いて外出した際、意識がもうろうとなったが、ジュースを飲んで回復した。身体所見：意識は清明。身長156 cm、体重64 kg。脈拍84/分、整。血圧132/80 mmHg。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血清生化学所見：空腹時血糖48 mg/dl、HbA_{1c}4.2%、尿素窒素16.7 mg/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、AST 28 単位(基準40以下)、ALT 27 単位(基準35以下)。血清抗インスリン抗体陰性。血清コルチゾール、ACTH およびグルカゴンは正常。

この患者の診断に有用なのはどれか。

- a セクレチン試験
- b 絶食試験
- c メトピロン負荷試験
- d デキサメサゾン抑制試験
- e 高張食塩水負荷試験

38 25歳の女性。両側の難聴を主訴に来院した。5年前から難聴を自覚し、徐々に増悪している。最近では耳鳴りも強くなり、会話にも不自由を感じるようになってきた。皮膚に多発性神経鞘腫がみられる。インピーダンスオージオグラムは正常である。純音聴力検査所見(別冊No. 12A)と頭部造影MRIの脂肪抑制T₁強調像(別冊No. 12B)とを別に示す。

考えられる病変部位はどれか。

- a 外 耳
- b 中 耳
- c 内 耳
- d 聴神経
- e 脳 幹

別 冊
No. 12 図A、写真B

39 30歳の初妊婦。妊娠33週。胎動が少ないとの訴えで来院した。妊娠初期・中期の諸検査に異常はなかった。1週前の妊婦健康診査では血圧は正常であったが、蛋白尿と下肢に軽度の浮腫を認め、子宮内発育遅延を疑われていた。その後、胎動が次第に減少してきたので不安になり早めに受診した。血圧130/70 mmHg。尿所見：蛋白1+、糖(-)。浮腫の増強はない。

まず行う検査はどれか。

- (1) ノンストレステスト
- (2) 超音波検査による羊水量評価
- (3) MRIによる胎児脳構造の評価
- (4) 羊水穿刺による胎児成熟度判定
- (5) 臍帯穿刺による胎児血酸素分圧測定

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

40 6歳の男児。尿量減少と顔面浮腫とを主訴に来院した。20日前に39℃の発熱と咽頭痛とを訴え、化膿性の扁桃炎と診断された。抗菌薬を内服したところ3日目朝には解熱していたので勝手に中止した。一昨日から排尿回数が減少し、顔が腫れぼったくなった。昨日から食欲が低下している。血圧130/90 mmHg。尿所見：蛋白1+、糖(-)、沈渣に赤血球多数/1視野、白血球5~10/1視野、赤血球円柱を認める。血清生化学所見：尿素窒素24 mg/dl、クレアチニン1.3 mg/dl。血清補体価(CH 50) 8 単位(基準25~35)。

この患児の治療方針として正しいのはどれか。

- a 安静時間以外はベッドから降りてよい。
- b 摂取水分量は不感蒸泄に前日の尿量を加えた分とする。
- c 摂取食塩量は0.2 g/kg/日とする。
- d 摂取蛋白量は2.5 g/kg/日とする。
- e 副腎皮質ステロイド薬を投与する。

41 24歳の未産婦。性器出血と下腹部痛とを訴えて来院した。月経周期は順調であったが、今回3週間の月経遅延があった。内診所見では子宮は鶏卵大、軟で、右付属器領域に超鳩卵大の腫瘤を触れ圧痛を伴った。血液所見：赤血球250万、Hb 7.5 g/dl、Ht 22%、白血球8,500、血小板12万。経膈超音波検査では子宮内に胎嚢を認めず、腹腔内に多量の出血を疑ったため開腹手術を行なった。開腹時、腹腔内に600 mlの出血を認め、右卵管膨隆部が破裂し出血が持続していた。左側卵巣と卵管とに異常を認めない。

適切な処置はどれか。

- a 両側卵管切除術
- b 右側付属器摘出術
- c 右側卵管切除術
- d 右側卵管結紮術
- e 右側卵巣提索結紮術

42 60歳の男性。昨日からの飛蚊症と視野異常とを訴えて来院した。眼底検査によって網膜剥離が認められたため、局所麻酔で手術を予定した。麻酔直後から著しい眼球突出をきたし、手術は不可能であった。この麻酔法の刺入時の写真(別冊No. 13A)と刺入後の写真(別冊No. 13B)とを別に示す。

この患者の麻酔合併症はどれか。

- a 眼球穿孔
- b 眼球破裂
- c 球後出血
- d 視神経損傷
- e 眼輪筋損傷

別冊
No. 13 写真A、B

43 72歳の女性。早朝に大量の新鮮血下血を認めたため来院した。顔面蒼白で眼瞼結膜に貧血を認めた。腹部は平坦、軟で、腸雑音は正常であった。脈拍120/分、整。血圧112/70 mmHg。緊急大腸内視鏡検査で多数の憩室を認めたが、多量の新鮮血のため出血源は不明であった。Hb 7.2 g/dlであったため赤血球濃厚液輸血を行った。しかし、血圧が70/30 mmHgまで低下したため腹部血管造影を行った。上腸間膜動脈から分岐する右結腸動脈の選択的造影写真動脈相(別冊No. 14A)と毛細血管相(別冊No. 14B)とを別に示す。

引き続き行う最も適切な経動脈的治療法はどれか。

- a 血管収縮薬注入
- b 副腎皮質ステロイド薬注入
- c 血栓溶解療法
- d 塞栓療法
- e スtent留置

別冊
No. 14 写真A、B

44 24歳の男性。リハビリテーションを目的に来院した。3か月前に高所での作業中、転落して頭部を強打したため救急車で搬入された。搬入時、骨折や胸腹部臓器損傷はなかったが、JCS 10の意識障害を認めた。意識障害は2日間で消退した。現在、運動麻痺と起立・歩行障害とはない。身の回りのことは自分でできるが、集中力困難と自発性低下とがあり、家でゴロゴロした生活を送っている。

社会復帰のために必要なのはどれか。

- (1) 理学療法
- (2) 作業療法
- (3) 生活指導
- (4) ナイトケア
- (5) 言語聴覚療法

- a (1)、(2)
- b (1)、(5)
- c (2)、(3)
- d (3)、(4)
- e (4)、(5)

45 57歳の男性。発熱と意識障害とのため救急車で搬入された。家族の説明によると、患者は通常の生活を送っていたが、1週間前から急に高熱が出現し自宅で臥床していた。この間、ときどき意味不明の言動があった。今朝になり頭痛を訴え、歯肉出血が出現した。呼名には応じるが見当識障害がある。体温 38.7℃。呼吸数 24/分。脈拍 108/分、整。血圧 120/60 mmHg。眼瞼結膜は貧血様で、眼球結膜に黄染を認める。四肢と体幹とに点状出血を認める。リンパ節腫脹はない。胸部に特記すべきことはなく、腹部に肝・脾を触知しない。項部硬直はないが腱反射は亢進し、下肢に病的反射を認める。血液所見：赤血球 190 万、Hb 6.5 g/dl、Ht 20%、網赤血球 90%、白血球 12,600、血小板 1.2 万。血清生化学所見：総蛋白 7.0 g/dl、アルブミン 3.7 g/dl、尿素窒素 56 mg/dl、クレアチニン 2.3 mg/dl、総ビリルビン 3.7 mg/dl、直接ビリルビン 0.9 mg/dl、AST 140 単位(基準 40 以下)、ALT 45 単位(基準 35 以下)、LDH 2,670 単位(基準 176~353)。CRP 1.5 mg/dl (基準 0.3 以下)。末梢血塗抹 May-Giemsa 染色標本(別冊No. 15)を別に示す。

この患者に対する処置で最も適切なのはどれか。

- a 電解質液の投与
- b 浸透圧利尿薬の投与
- c 濃厚血小板の投与
- d 新鮮凍結血漿の投与
- e 血液透析の導入

別冊
No. 15 写真

46 26歳の男性。オートバイで走行中転倒し、喉を強打して救急車で来院した。意識は清明であるが、声は出しにくく、疼痛、血痰および強い呼吸困難を認める。体温 37.0℃。脈拍 96/分、整。血圧 140/86 mmHg。他の身体部位に打撲はない。喉頭ファイバー検査で喉頭部の出血と粘膜腫脹とを認め、両側声帯の動きが悪い。頸部単純 CT で甲状軟骨の骨折・偏位を認める。

この患者に最も適切な対応はどれか。

- a 呼吸訓練
- b 鎮痛薬投与
- c 内視鏡的止血術
- d マスクによる人工呼吸
- e 気管切開

47 38歳の男性。意識障害のため仲間に伴われて救急車で搬入された。本日、海で水深 30 m 程度のスキューバ潜水を楽しんでいた。2回目に浮上したとき、約 5 分後に全身倦怠感を訴え、意識を消失した。搬入時は意識は清明で、顔面腫脹、両上肢の感覚低下および両下肢の運動麻痺と感覚低下とを認める。血液所見：赤血球 560 万、Hb 20.2 g/dl、Ht 61%、白血球 8,800。胸部エックス線写真に異常はなく、心電図は正常範囲である。

適切な治療法はどれか。

- (1) 輸液療法
- (2) 全身マッサージ
- (3) 低体温療法
- (4) 血栓溶解療法
- (5) 高圧酸素療法

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

48 11か月の乳児。けいれん重積状態のため母親に伴われて救急車で搬入された。周産期に特別な異常はなかった。定頸4か月、定坐7か月、つかまり立ち10か月。今まで発熱時に約5分間持続するけいれん発作を2回経験している。3日前から咳嗽があった。本日、39℃の発熱とともに全身けいれん発作が出現し、発作と休止を繰り返している。口内分泌物が増加し、チアノーゼを認める。うっ血乳頭の所見はない。

直ちに行うべき処置はどれか。

- a 気道の確保
- b フェノバルビタールの筋注
- c マニトール液の静注
- d 抗菌薬の投与
- e 解熱薬の投与

49 生後96時間の新生児。皮膚の黄染が増強した。在胎38週、体重3,300g、経膈分娩で出生した。妊娠中に特別な異常を指摘されたことはない。1回当たりの哺乳量は20~40gであり、活発に活動している。血液型A型、Rh(+)。両親の血液型は母O型、Rh(+), 父A型、Rh(+)で、児の現在の血清総ビリルビン値は18mg/dlである。

最も適切な治療法はどれか。

- a 母乳中止
- b 肝庇護薬投与
- c リンゲル液輸液
- d 光線療法
- e 交換輸血

50 37歳の女性。3年間の不妊を主訴として来院した。月経周期は30日型、整で月経持続日数は5日である。基礎体温は2相性で、高温持続日数は14日前後である。子宮は正常大で、両側付属器は触知しない。夫の精液所見は正常で、性交後試験で子宮腔内に運動精子を認めた。子宮卵管造影写真(別冊No. 16A)と24時間後の骨盤部エックス線単純写真(別冊No. 16B)とを別に示す。

この患者に適切な治療法はどれか。

- a 人工授精
- b 体外受精・胚移植
- c 子宮頸管縫縮術
- d 子宮筋腫核出術
- e 子宮形成術

別冊
No. 16 写真A、B

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受験番号	氏名(楷書で書くこと)

C

C